

## 石川伍一日記を読む（三）

大里 浩秋

まえがき

ここに載せる石川伍一日記の解読文は、本誌第一九一号と第一九二号に掲載した文の続きに当る。石川伍一の経歴については、第一九一号に簡単に紹介し、さらに詳しくは第一三五号に「石川伍一のこと」を発表しているので、参照していただきたい。

解読文は、原文中のカタカナはひらがなにし、人名を除く漢字の旧字体は新字体に改め、適宜句読点を付している。また、「」によって文字の不足や不明な点を補ったところがあり、原文中に一字ないし二字分の空白がある箇所は、その通りに空白にした。解読できなかつた文字は、一字分を□一個で示した。特徴のある字体で前回までの日記も解読しにくかつたが、今回は鉛筆書きの部分（三月十九日から二十三日まで）があるために、余計に判読に手こずった。

なお、解読に際して、今回も常民文化研究所田上繁教授の援助をいただいた。

## 明治十九年三月から六月の日記

三月一日 晴 月 念六

曾根氏より縉紳全書に付き十八省の疆〔疆〕域、風俗、土産、文武官等の取調を命せらる。限るに十八日を以てす。

三月二日 晴、和暖 火 念七

曾根の命を以て跟班を従へ三義口に至り船を見る、有る無し。帰路河東を過る。塩山畳々数丁に跨る。快馬、海馬、第一、第二飛鳧、鉄龍の小汽水中に碇泊するを見る。聞く此日太沽に於て氷破れて四、五人死する者ありしと。

此夜クラブに於て舞踏会あり。蓋し独逸領事委員長となり、妻女を有せざる者より招きしと。云西洋の慣習に妻女を有せざれば客を呼び饗宴する能はずと〔と〕。領事及鄭氏招かる、両夫人伴焉。此夜の会には皆装を変し形を換ゆるを以て、鄭氏蝦蟇に化し、夫人は宮女、領事は甲武者となり、夫人は田舎娘に作る。西人或は猿になるあり、高麗服あり日本服あり、千種万態の様なりと。而して多〔く〕は古代之服装をなせしと云ふ。

三月三日 晴 水 念八

氷破れて八、九人の死あるを聞〔く〕。

此夜汁粉を製す。

四日 晴、和暖 木 念九

氷大に破る。川開の報あり。即ち河岸に到り見る。大塊小 相連りて流る。長さ一折に及ふものあり、当らは碎け衝けは相推し、共音凄まじかりし。看英軍艦に至る。一西人の日本語を能くするあり、佐氏を見て懇話、今將に此処に水雷火を以て氷を壊るを告ぐ。一下士小洋鉄箱を携へ之を氷の下に沈め導火に火し退く。少焉くして一声爆烈大片小片飛て三丈余に至る。頭上に落ちんとするか如し。驚き退く。西人は蓋し仁記洋行に居る。皆な曾て日本にある九年と云ふ。帰路武備堂教師生徒を携へて測量を荷はせ河下に至り、須臾にして還る。其河の爲めなるやを知らず。瀬川浅之進なる人北京より至る。此夜鄭氏の所に闘牌す。

五日 晴、和暖 金 念十

下午郊外に蹴球の遊を爲す。疲甚し。

六日 晴 土 二月初一

此日午下仁、瀬、徳、武、堀五氏及予と紫竹林に於て写真す。

領事の發議を以て当地書生仲間より一の雑誌を發行し、之を北京、上海及煙台に送り以て見聞を取換し、且つ世俗の文を学はしめんとなり。編輯之事は武藤氏之を司れり。

七日 晴 日 二月初二

昨日編修し今日の出版なる。忙甚し。写字及印刷之事を助く。印刷は即ちユッピーと称するものにして、二、三張を写取すべきものなり。去る四日海関道周馥氏は、仏国総領事シルロン氏安□順化府駐在の代理官とし、独領事は広東駐在に任せられ、開河第一の船にて任に上るを祝し訣別の宴を水師營終弥に開(き)、各国領事、船長

を招き支那料理を饗せり。伍廷芳氏周馥に代り英語にて両領事を送るの詞を演し、法領事は清語を以て之に答へたりと。伍氏は嘗て英に在る数年、法律学士の名位を取りたりと。

此夕領事客を招て夜餐の饗あり。共にする、領事、鄭氏、及両夫人、豫、仁礼、瀬川、佐々木、徳、武、堀、予の十二人にして、曾根氏は事ありて辞す。

八日 曇 月 初三

曾根氏の処に写字す。夕鬪牌す。

九日 風、晴 火 初四

此日曾根氏之処に函を引く。兩三日前より河全く開〔開〕け、近日汽船到着すべしとの事なりしか。此日高陞号第一に太沽に入るとの報ありしか、河中にて乗越たると見ゆ、順和号遂に着津の一鞭を付たり。

此日英軍艦セファール号香港に向て出港し、清軍艦鎮海号入港す。

此夜三発の砲を發し海晏号達す。乃ち行き見る。行人東西に 互し、群衆雜選。徳丸氏学校に帰る。此夜牛を煮る。安保氏より信達す。

十日 晴 水 初五

午前曾根氏の処に写字す。

前北洋艦隊司令官なる英人ラン氏又た雇はれ、海軍のことを管する由。

河東に新築せる武備堂は房三百余を有せる大厦なりと云ふ。

穆仁徳氏は武備堂繙訳に任せられし由、紫竹林にて新築の立派な家に入りたり。

此夜瀬川氏乗船す。之を送る人之喧囂、道路上荷は山の如く、実に今日の天津は昨日の天津と異なり、殆ど別世界に入るか思ひをなせ〔る〕。高陞、豊順之二号入り居れり、瀬川氏は高陞に上る。美なる船なりし。此日郊外籠球之遊を為す。

十一日 晴 木 初六

朝二氏と河浜を逍遙す。遂に同昌に至り手帳を買ひ、帰路写真写〔屋〕に至る。未だ成らず。是より先き兩三日佐々木氏より刀代七元及別に一元を給せらる。因りて小掛二件、単襪二件、襪子二双を買ふ。

十二日 晴 金 初七

九時頃米艦モノカシー号出帆す。樂を奏し別を送るの中に悠々と出てしも面白かりし。午下武氏と河岸を散歩し豫君の処に到り帰る。幾くもなくして豫氏至り遊歩に誘ふ。共に堤に上り東北に行き河岸に出つ。復砲台に登る。帰途仁礼氏を訪ふ。鬪牌之遊を為し還る。夜領事之処に話す。

十三日 晴 土 初八

午下領事及び夫人、武、堀二氏と散歩す。堤より河岸に出て下りて堤外の下を行く。太沽路より右に入る少許古墳二あり。一場の面白き話ありたり。此墳に各五、六の穴ありたれば、皆々怪み見る。一は四方の穴をふさぎて一の口より火を焼きたる様なり。此れは狐巢したるを薰ほりたるならんと。今一の墳を視れば果して狐の足跡あり。一人曰く、必定此中に狐住む、見えたり燻し出さんと。今一人は、狐は人話を解すと聞けり、逃去るへし。又一人あり、こは支那の狐なればよも日本語は解すままと云ふて、大笑せり。

此日鄭氏崑蕩板を買ひ来より、明日新誌は此にて刷するべしと。

十四日 日 晴 初九

此日は一日雑誌のことにて終へたり。晩話会ありたり。

十五日 月 陰 十日

午前曾根氏の処に写字す。

写真出来せり。

十六日 火 陰、雪 十一日

午下四時頃より降雪霏々たり。

十七日 水 晴 十二日

朝起望すれば白雪班 長堤の雪を帯たるは一場の目布を懸けたる如く雅景佳なり。

十八日 木 陰、風 十三日

朝梶山中佐当地に着す。 吳永壽二氏従ふ。是より先き昨〔日〕着の報ありたるを以て、豫君は午上馬と、

午下再とみて、又領事は文具を随へ馬に騎り四、五里迎に出られたるが、空く帰られたり。梶山氏は長州の人なる由。

十九日 金 晴 十四日

此日舎弟に送る信を曾根氏に托す。内に大人に送る書と故郷に送る者とを包めり。此夜曾根氏子に告げて曰く、我四月中に帰朝するの命を受けたり。因て汝を佐々木氏に托せしに、氏曰く漸く我口を糊せり曷ぞ能く人を養はんや。辞せられたり。汝再ひ行て之に隣〔憐〕を乞ふべしと。去冬佐々木氏上海より帰るや子を養はんことを云

ふ。是を以て信して疑はず。今此言を聞き心大いに不平なり。乃ち馳て豫君の所に赴き情を告ぐ。氏之を憐み百方策を考ふ、奇計なし。遂に仁礼氏養ふと。予其は費を給せし先つ領事に謀るへしと。帰る。而るに予領事に托するを屑とせず。固より行はれざるを知るなり。

二十日 土 晴

曾根氏行李を装するに忙し。予は写字をなす。夕蹴球の遊をなす。

二十一日 日 晴

此朝岸田吟香氏□今度の北京の試験に付書籍を売るか為に重慶号にて着津せり。此日は行李を拮掇す。佐々木氏予の為に岸田氏に説き、其夥計となることを以てせり。因りて曾根氏と上海に発することに決せり。佐々木氏に托せんとせしが□なく、言ふ□□□□しに氏は遂に予を拳□せり。此夜吟香氏北京に向て発す。時に明月爽涼たり。曾根氏留別之宴を同昌に開く。

二十二日 月 晴

重慶号(即ち予か前に乗る所なる)昨〔日〕着し、明〔日〕発するの報あり。行装概ね整ふ。□昨日の事□天津劉小亭を訪ふ、在らず、一人を買ふ。此夜領事及鄭氏、曾根氏を送るか為めに支那料理を饗ふ。堀内氏牛を煮て予の行を送る。仁礼氏、徳丸氏、武藤氏、予か行を送るの詩あり。此夕行李を船に搬す。

## 二十三日 快晴、風 火

早起船に上る。相送る者鄭氏并夫人、仁礼氏、豫氏、徳丸、武藤氏なり。八時船將に出てんとす、乃ち辞別す。船は除〔徐〕々として進み慢々として退く。衆川に從て下り送る。時々帽を振り手中を動かし別を惜む。予振るへき者なし、乃ち辮髪を取り之を振る。衆皆大笑す。一英国宣教師（常死之時に臨みし人）の歸るに遇ふ。二童又た従ふ。朋数人ある。之を送る。別るに臨み二児慟哭別れを惜む。一友の一児を従へるあり。船に從つて相送り砲台下に到る。船は台下少許の地回転をなし（此時少しく時の費）東進途に壁を繞らし樹を植て□したる墓ひ〔碑〕を見る。想ふに何人の骨を埋めしなるへきか。河岸数多の村落を経過す。両旁の地□□□□□□□□竹木に緑蒼の染むへきの地之青草の目を慰むへきもの□□景色□□へたり。（途に保大、新南陞の上るに会す。又支那軍艦□江号の下らんとするを見る）。温州の来り海琛の□ふを見る。十二時半頃新城の砲台を過く。一時左方に洋屋の美なる者二、三家を見る。又計風署の如きものあり。群醜の内に峨然たる殊に空に立てり。左に馬營を望む。二時太沽に着し汐を待ち、四時二十分頃出帆す。此夕風大に起り黄塵天を掩ひ日為めに暗淡たり。此辺帆を掛け塩井を汲むものを見る。△支那軍艦鎮東、鎮西の碇泊、外二隻の太沽船渠内にあるを見たり。太沽沖に清艦二隻及商船数隻あり。此夜風烈しく波荒し。

## 二十四日 晴 水

朝六時頃模糊の内山東登州地方の山脈を望む。八時頃煙台に入港す。煙台の地は、西に山を背ひ南に走り西北は□野にして北に小丘あり。其脈に南西は欠く。南に岡阜を帯ぶ。日本領事館此上にあり。此日は西北の風ありて波激し。暫くは客を上陸せしめず。午後より許して上らしむ、続々として断せず。聞く毎年山東より山東に椽に



出て閉河の候に帰ると。此曹生時期に後れて今開河す。帰家するものか五時にして止む。乃ち出帆す。

此港には清軍艦一隻、英艦一隻(天津にありし)商船保大及兩三隻、帆船數隻碇泊するを見る。鎮海号入港したりし。此夜夢中に山東の岬角を過く。

二十五日 晴 木

水天茫茫目を遮る者なし。

二十六日 晴、西北風 金

六時半頃一島の燈台ある者を見る。清人云ふ、「チャーサン」と云ふ。八頃(時)頃高陞の北上するに遇ふ。益す呉淞に近きを知る。漸くにして左方に大陸を望む。海岸一帶材木を植たるか如し。又暫くにして右に崇明島を見る。左に渺々たる揚子江の濁流なり。呉淞砲台に近くに、鎮遠号の傍を掠めて去る。此は去年德國製の新艦にして、我か未だ目撃せざる形なり。両舷平にして中部に高て舳艫に砲を置き、且つ煙筒旁各二個の砲を見たり。外二隻あり。一隻の形鎮遠に同し。一時過呉淞に至る。溯少焉にして、清艦三隻巖然として並列せり。基は南琛、南にして、一を詳かにせず。又溯りて登瀛州号の停泊したるを見る。製紙場、自來水□、新船渠及浦東、黄口の兩岸を看て、遂に東洋第一繁華の上海市街に着す。蓋し午後三時なり。

領事館及大浦氏、島氏の宅を訪ふ。

此夕日本郵船至る。海軍派出員三名着す。武富氏福州に、関氏天津に、邦山氏は当地に滞在すと。宗方氏来る。

## 在滬日記

三月二十七日 晴、和暖 土

在家終日写字。

同二十八日 晴、暖 日

訪乍浦路荒賀、島津諸氏寓、時宗方、山ノ内兩氏亦來會、談話數刻而歸。此夜尋野口氏於崎陽号。

同二十九日 晴、暖 月

此日治曾根氏之行李。武富氏將赴福州也不詳其地理形勢、故得一人欲為嚮導。謀之於曾根氏之薦牟田氏。

此夜買麥酒及黃鷺予□牟田氏赴福州。

同三十日 朝細雨、午霽 水

牟田氏赴福州之議決矣。此日辭錦芝洋行移武富氏之寓崎陽号。蓋錦芝主人不喜。午下運曾根氏行李於名護屋丸、

□汽船明曉出帆也。曾根氏宿於此將待黎明上船。此夜曾根氏招於送別會、待歸至二時遂不還。

托氏寄一書於弟壽、內包有奉家君信。

三十一日 大霧、雨 水

此朝六時赴輪〔輪〕船。曾根氏先在焉。送至者十數人。此日錦芝洋行主人亦歸長崎。時大霧濛々咫尺不弁。臨別

曾根氏呼予告曰、暫托爾身於〔金子〕種三郎氏、因在彼可待岸田氏婦申。其間月給二元。八時過解纜除〔徐〕々

而去。遠望離別之情自依々。此夜送牟田氏之福州至富有号。道路に泥濘太甚。

四月記事

一日 朝陰、午晴 木

自此日在肆執務。長尾氏來焉。氏曩者跟某英人、其後出居バブリンクウエイ之或支那村落。識南京人鄧浦者前因赴南京。然今者当之長崎、又速帰滬而後発南京云々。小笠原氏訪予寓。前者在田代屋、有西人開塾教日本者因入塾、幾而廿人散校閉。今在本願寺後借某一室住、為浦東造船処学徒云。日本輸〔輪〕船広島丸來申、邦山淳氏來宿。

二日 晴 金

午時積三介氏以海晏号向天津前托寄武藤氏之一封、内有呈佐々木氏書。

三日 前陰、下雨、夜有星 土

使アストルハウス及領事館。此夜於篠崎氏室為鬪牌、至深更止焉。種氏、岩崎氏、及山口及予也。篠崎与岩崎長崎之商賈而為石炭買売、云曾在朝鮮久熟其風俗又至魯領浦塩港今在錦芝洋行。

四日 陰 日

買靴子八十錢、襪子二双三百文、手巾五十錢、インキ五仙、刷牙子及刷牙散十錢、洋刀二十仙。

五日 曇 月

使仏蘭西ホテル。夜再使焉。

六日 朝陰、夕雨 火

野口君來話。

七日 朝曇、午雨 水 三月初四

先是兩四日日本軍艦清輝入港。

八日 快晴 木 初五

此日日本郵船橫浜丸着、塩田公使并隨員來。夕至崎陽号。

九日 朝曇、午雨、夕晴 金 初六

此夜鬪牌於岩寄氏室。

十日 朝大雨、霽而好天、日暖 土 初七

日本公使与領事、書記生來店肆。時正際桃花之節、遇此良日才子佳人駕輕車衣錦繡帶桃花而還者太多。

十一日 曇、雨 日 初八

聞龍華桃花之滿盛。此日与友欲成策以雨不果。午下夕訪小田切氏於崎陽号。氏駐天津留學生也從公使而來焉。与共者公使息子及宮崎、辻本兩書記生、北条也。記送德丸氏一封。昨領牟田氏書。氏托送德丸氏之書。

十二日 曇、晴 月 初九

此日剃頭。此夜草送白須君之書。

十三日 晴、夜雨 火 初十

聞此日於浦東有金刀毘祭居留男女參詣頗盛。此夕訪小田切君托送白須君之書。氏以此夜上高陞船明朝將發。蓋以塩田公使發□。

十四日 晴 水 初十一

此夜訪小笠原氏。時有一葡人能官話在法教会學校教小兒云々。小笠原氏与鈴木、岡山二氏借本願寺後支那人家居焉。取食於北川蓋月費五、六元、云借時事新聞及岩手新聞、以少得見故国之形勢。

十五日 好晴 木 初十二

日本郵船東京丸來。

十六日 晴 金 初三三

宗方氏來話。

十七日 晴、曇 土 十四

識宮城人大場峻。

十八日 好晴 日 十五

此日九點鐘上海義勇兵供儀仗送其帥。某社長 氏也。將帰国故也。予等行見焉。二隊凡 人許整列以待及至施棒銃之礼。 氏為一場之演說。完則闕声之回祝之由公園傍乘小大輪船而去。山口、大場二氏提予共欲看清輝艦。蓋以予知人金田一氏也、乃遂行矣。金田一氏予同国之人也性温厚。去年夏清輝由芝罘來。氏曾識東氏以故得相知也。至艦相見叙別後賀平安談話懇々、与二氏回覽艦内所裝置阿莫斯命五十五□砲四門、及別大者一門(長三□許)、又有機砲□一分間発二百六十余彈蓋ノルテンフィルト砲也。彈以鋼鉄造備防水雷船。看完在艦板上遊戲時有一支那商船張帆而來直撞衡軍艦。水兵集艦上士官命令見機禦之急下短艇乘支那船指揮之、少傷支持短艇者乃呼來其船長□□不在、老頭(水夫頭)至矣。副艦長使予詰衝突之由且書謝罪狀、予即述其意不通□問解字否。彼不能解一字、僅有解者一人伴來書以示可書出謝罪狀。彼來知也、先是支那船之撞突者兩三次又書以謝罪即写給

一通至船長所（在通州）。△潮流激而風小舵為誤其方向致如此云々。彼唯日、清写捺印聞若撞外国船必要償、然日本特以寬大之旨宥恕之。彼当叩頭九拜謝恩、今彼無恐懼感心之意。古語荆舒惟膺戎狄惟懲、實以一謝罪不足懲此狡黠奴也。享洋食之饗遂至浦東。此日亦有書生親睦會。士官及水兵等為擊劍之遊、或分紅白兩旗樹竿上互奪之。又有源平仕合及攏球等之戲。举帆□舳板而發見東京丸而 歸路歸家。此日実尽愉極歛。

十九日 月 晴 十六

二十日 火 晴 十七

澤村氏來話。

二十一日 水 晴 十八

金田一氏來話。東京丸發寄書於曾根氏。

二十二日 木 晴 十九

名護屋丸入港、大坂牙医西村氏与二書生來焉。訪荒賀氏。

二十三日 金 晴 二十

訪小笠原氏、不在。歸途至澤村氏所、先是氏亦長尾剃頭矣。聞此年一、二月之交氏与小笠原、荒賀諸氏舟至蘇州。經日三日往復雇一船銀六元、彼地山水明媚、云有耶蘇堂信者百人許、西人住焉。有病院有博物館、款待懇切云々。氏等之赴蘇州以告領事館不輒道台之照會歸後蒙罰禁錮五、六日云。近日氏將經內地赴北京。

二十四日 土 雨 二十一

二十五日 日 晴 二十二

前訪宗方氏於品川氏之居。氏今病瘧腦。談話間氷見氏至告曰明日發漢口、乃托言大河平及 兩氏。先是田邊氏之鎮江聞前田辺氏乘清輝号遡長江為通弁云。借正氣歌果本書於宗方氏、金田一氏曾托予買之、予求不得因借而寫焉。夕至崎陽号。

二十六日 月 晴 二十三

無事可記。

二十七日 火 晴 二十四

此日金田一氏來訪、写正氣歌一冊送焉。野口氏以明〔日〕出帆之名護屋丸歸任国。依訪之不在。

二十八日 水 晴 二十五

黎明輸〔輪〕船出發。夜間小笠原氏病。氏病少愈散步不在家。歸路至澤村氏処、小笠原氏為在焉。依相伴復歸小

笠原氏処、談話数刻而還家。

二十九日 木 好晴 二十六

長尾氏至矣、相伴至小笠原氏寓。与共訪軍艦、金田一氏途會焉。氏曰、艦当以明日發於長崎故繁忙太甚、乃辭還。午下長尾氏□人給予单衣一件、至長尾之寓。六時歸家。

三十日 金 晴 二十七

無可他事。

此月は洒掃に従事し、寸暇なきにも非されとも、兎角読書意の如くならず、怠り勝に日を消したり。語学の事も

氣に掛れとも、金を給する人もなく詮方なし。予の尤も益友なる牟田君及澤村君は此月此地を去れり。予の牟田君とは縁薄く、始めて相識りし時間もなく氏は芝罘に赴き、氏芝罘より帰れば予は直に天津に發し、予天津より来りたれば氏は福州に赴けり。離合集散は世の常と言ひ乍ら、如此は世には稀れなるべし。

五月中日記

一日 好晴 土 念八

此日午下訪宗方氏、門闕不入而帰。

二日 好晴 日 念九

訪小笠〔原〕氏寓還新〔聞〕紙及書籍。又至宗方氏処送所借之書別借広輿記三冊。午下与種氏至長尾氏於ハブリ  
ンク路。

三日 晴、暖 月

上海春季競馬自此日始。澤村氏至告明夜出發、聞汽船到鎮江自鎮江上揚州陸行從江蘇徑山東入直隸云々。

四日 曇、雨 火

此日種氏及家内赴看跑鳥。予得風邪一日在家。此夜訪澤村氏於其寓。氏曰吾所經必為紀念云々。九時半頃出宿臨  
發發拳銃一彈、曰相祝。予辭還。

五日 上半晴、下午雨 水

風邪不愈寢至午、身体疲甚。散步跑馬場見競馬時雨降。訪長尾不在。



六日 曇 木

覺身熱、頭痛乃臥床。此夜製卯酒出汗、遂不治。

七日 晴 金

八日 晴 土

此日有跑馬。係跟西人飼馬者及水兵等。天好晴故雜沓。

九日 晴 日

午下至小笠原氏及宗方氏寓不在、帰途訪荒賀、島津二氏、熊本八代藩族主従木脇、宗方二氏在焉。談數刻而還。

四時頃鈴木（仙台人）氏誘島津及八代主従來乃与山口、邦山、金子三氏同遊バブリンク路支那花園、花園在自申園近數町之地、前曾西人所造而清人購之以供遊覽地。極閑清〔静〕有池泛舟小山上構日本風家屋雅致上比可以臥、清風瞰全景四時華美之草花充滿室中異香襲衣、有西風屋家卓榻画美裝飾頗佳、每室煮茶待客暇時散策可以消悶。

十日 月

風邪未愈、咳嗽漸太甚。

十一日 火 曇又晴

午下与長尾、山口二氏写真□。

十二日 水 雨

日本郵船横浜丸出港。

十三日 木 半晴

十四日 金 晴

日本郵船東京丸入港。長尾來訪告郷里両母計共驚悲耳。談話數刻相伴至氏寓。

十五日 土 雨

風刻太甚咳嗽益激、至用吉先生請診察□□藥來。

十六日 日 雨

一日在家讀書。

十七日 月 雨

用吉先生に至り、藥等下痢を求め帰る。

十八日 火 晴

午下訪長尾談話、与婦氏遂宿焉。此夜咳嗽太甚大苦。

十九日 水 晴

郵船東京丸出港。此日頭痛熱出身体揺々懶折為事。遂午後より床に臥す。熟々思ふに千里の遠きに出て親族もなく金もなくして病の床に臥す程憂き物はあらし。予も今迄長き患ひをなせしことなければ左程の事とは思はず。又常に病を推して治りしことも屢々なれば、人の病に苦むを見ては其人の氣の弱きを笑ふて居りしか。今自ら病に犯され与に語ふ人もなく、衣食の事も意の儘にならず。我か前に人の病を思ひし如く人も亦た我を思へば誠にか程つらき事はなし。屈原の 困苦すれば未だ曾て天を呼はずんはあるべからず。病疾 すれば未だ嘗父母を呼はずんはあるべからずと云へる。乃世の不易の金言なり。斯く言ふは我病の愚痴なるべし。

二十日 木 晴

名護〔屋〕丸入港。曾根氏信至。

二十一日 金 晴

至用吉先生処聞岸田氏昨夕安着、乃此晚訪氏不得面談。只受鄭氏書而歸。內有家弟与貞助、白須氏之信、皆上月係所發。此日病大愈。

二十二日 土 晴

無可記事。

二十三日 日 雨

午前雨、午後晴、訪小笠原氏、又訪仁礼氏於崎陽号。氏昨日与島田書記官、渡部書記生共自天津至焉。此夕氏至邦山氏処談話到夜半、予陪時間氏遭賊難之顛末。

二十四日 晴 月

訪岸田氏、以多忙不面。

二十五日 晴 火

午下訪仁礼氏托送曾根氏与舍弟書、舍弟信内包□□君及畠山之信。此夜送氏於船。

二十六日 水

此夕訪岸田氏。氏日来月再来□計画焉。東京郵便〔船〕名護〔屋〕丸出港。

二十七日 木

郵船広島丸入港、河野主一郎君来。君鹿兒島三州社長也。前曾根氏送一書於予告君来。此夕訪君談話、君曰遊歴各名港。重野編輯官之男衆来。

二十八日 晴 金

此夕与瀧、西田散步。

二十九日 曇、雨 土

三十日 小雨 日

訪小笠氏。

三十一日 月

此より先き長尾氏予に単襖一件を買給す。

五月中日記掲要〔見出しのみ〕

六月中記事

六月一日 火

荷物横浜より達したる、以て忙はし。

六月二日 水

広島丸十時出港。岸田氏を訪ふて先の事を訪〔問〕ふ。氏曰く、家事紛擾治め難し、須臾く待つべしと。

六月三日 木

横浜丸入港後荷物の為に忙し。岩崎氏来。

六月四日 金

此日忙如前日。金一元を種氏に借、先是三十銭を借りたりし。鞋を買ふ。

六月五日 晴

夜与長尾相伴至其寓。氏与予单衣、单褲。

六月六日 晴、暖 日 五月五日節

此朝掃除肆店。午下訪花坂氏於崎陽号。氏前数日已至当地。談話数刻氏給予以洋書四冊相共出至岸田氏。氏病熱在病床、遂至仏租界日本店浪川婦家。氏誘種氏及余食於 二春。

此日予居を店に移す。江西路の宅は小孩傍に叫喊し雜事混乱読書すべからず。故に此より先き夜具を門口迄運ひたりしも故ありて止む。其後岸田氏帰申したれば今日か明日かと待たりしも、今や善事は忽にすべからずと心付きたるにより匆々引越したり。家始め只閑静読書に可なるを思ふて後院の娼家歌舞弾吟四壁に喧しきを思はざりし。此夕訪小笠原氏及荒賀氏、宗方氏亦在り談数時にして帰る。此日遽に暖度を増せり。

此より先き義伝勲功記、朝鮮軍記、仏国革命史、真田三代記等を借読せり。

六月七日 晴 月

昨日より漸く暑暖の候と定まりたるか如し。

六月八日 晴 水

此日花坂氏乗船するを以て崎陽号に至り氏の行李を整ふ。氏子か窮を憫て三元を恵投せらる。夜送て船に至る。行李に随て諸客送り至る。三賓酒を開き祝す。十二時過別を告げ宿に帰らんとす。氏子を戒めて曰、謹て身を慎み国人を辱しむる勿れ、青雲の志を後にし先づ艱難刻苦に耐へざる可からずと。予曰、敬て□□せん、此れ我が自ら誓て期するなりと。乃ち帰る。

六月九日 晴 水

此日昨日恵せらる、所の金を以て単衣、小樹子、褲、口袋、フランネル等を買、二元七十銭なり。

六月十日 雨 木

無可記事。

六月十一日 晴 金

東京丸入港。

六月十二日 雨 土

六月十三日 晴 日

前小笠原氏に至り、弟に荒賀氏の病を訪〔問〕ふ。氏病床に在る已に月余。午後長尾の所に遊ぶ。申園の辺を逍遙す。青草地に布き緑鞣すべし。

六月十四日 曇 月

六月十五日 雨 火

六月十六日 水

東京丸出帆、大人及舎弟に送るの書を認めたれとも、遂に送るを果さず。

六月十七日 晴 木

郵船名護屋丸入港。松木なる人中野二郎氏の書を持ち来り上海に滞在するを告げ、与に島津氏の所を訪ひ遂に氏と共に下宿することと定めたり。

六月十八日 晴 金

此日より地理図を取調ぶ。鎮<sup>□</sup>県誌の句読を尽まる。

六月十九日 曇 土

六月二十日 晴 日

此日午前荒、小笠二氏の居を訪ふ。炎暑焼くか如し。

六月二十一日 晴、以大熱難堪、夕曇 月

此暮驟雨大に至り流る、か如し。

六月二十二日 晴、曇 火

此夜小笠原氏来話、澤村氏の来信を示さる。氏は去月四日を以て当所を発し、同二十八日を以て北京に安着せり。其書に より驢車に乗り恰も啞者の旅行の如くなれとも兎角世の中は金力と腕力とに因り如何様にも成るへし、名所旧跡に半<sup>□□□□□□□□</sup>是をして泰山に登りて四百余州を下瞰せり云々。

六月二十三日 半晴 水

午下岸田氏を訪、在らず。名護屋丸開覽書を家弟に送る。

六月二十四日 雨 木

東京会□氏より來信、畠山氏祖父、老母双親の訃を報す也。并に貞助の兄病に付貞助帰国の事。嗚呼大何、予か党有志等をして此の如き罪に遭はしけん。

広島丸入港。岸田氏を訪、面せず。

六月二十五日 雨 金

佐々木氏に信を送る。内〔に〕有徳丸に送るの信。〔続けて、「二十七日に延引」とメモ書きがある〕

六月二十六日 雨 土

夕岸田氏を訪ふ、面せず。九時半再び訪ひ談晤するを得たり。兎角因循延引事を決せず。抑岸田氏を訪ひしは去月二十二日にして、其後二十六日漸く面するを得、待ち今日に至る已に一月也。予か錦芝に在る一錢を給するなく、困窮何か堪ゆ可けん。是より先き花坂氏来り予に芝罘に行くを勧む。予当時猶ほ固く岸田に托せんと思ひしも、今に至り顧みるに違あらず此事を決せり。且つ又数多の利益を見出せり。又岸田と縁あり之と断するに非ざればなり。

六月二十七日 雨 日

此日雨を以て終日閑居、長尾氏来る。

六月二十八日 雨 月

六月二十九日 曇 火

東京家弟に書を送る。内に畠山氏の一封を包む。



六月三十日 雨  
水  
郵船広島丸出港。